



教皇様の叢

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 © 1992 発行所 財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL 0797-31-3452・FAX 0797-31-3448

償いの精神としるし

1 「心をあげて、私に立ちもどれ。」(ヨエルの書二・十)

主は預言者ヨエルの言葉を通してこのように仰せられました。すべての人、そして一人ひとりの心に語られました。心、すなわち最も内なるもの、二つとない「私」に訴えられたのです。立ち戻らなければならぬのは「私」です。「私」において、立ち戻りが始まり、そして完成します。悔悛は内的で個人的なこと、服だけではなく、心を引き裂く(ヨエル二・十三参照)ことです。預言者が語るように、「断食、涙、嘆きをもって」(ヨエル二・十二)主に立ち戻るべきであるなら、それは内なる人格である「心」に留まらなければならないということです。

2 イエズス・キリストはこの点について山上の説教でさ

らにはつきりと指摘されました。「施しをするときには、右の手でしていることを左の手にさえも知らせぬようにせよ。それはあなたのする施しを隠すためである。そうすれば隠れたことを見られる父が報いを下される。」(マテオ六・三〜四) 大切なのは「御父の眼差し」です。御父と二人きりにならなければなりません。心の奥に隠しておくことこそ、立ち戻りを再発見するための条件です。立ち戻るために準備しておく必要があります。「罪についてこの世の過ちを指し示し」(ヨハネ十六・八参照) 続けてくださるのは聖霊です。その聖霊のお働きを受けることができるように、心を広くし

3 真理の霊は罪について、この世にその過ちを指し示さ

れます。恐ろしい秘義を私たちに示されます。悔悛の中心に見出すのはこの秘義なのです。四旬節という悔悛と償いの時期全体に深く刻み込まれている神秘です。罪の神秘はまことに恐ろしいものです。使徒パウロは神との和睦を勧める中で、罪の恐ろしい結果について語っています。「神は罪を知らなかったお方を私たちのために罪となされた。それは、私たちをその方において神の正義とするためである。」(2コリント五・二一) 罪は神の聖性(正義)に反することです。そして罪を取り除くためにその神の聖性(正義)が、つ

まり神の充満そのものが使われませんでした。内なる場が必要です。キリストにおいて「最後まで」(限りなく)その愛を示してください。神と一対一になる必要があります。そうすれば「私」の中で立ち戻りが実現し、神の聖性(正義)となることができます。ゲッセマニのキリスト、聖金曜日に恐ろしい苦しみを受けるキリスト、私たちの心の眼に罪の重さを示すため、「神よ、なぜ私を見捨てられたのですか」(マテオ二七・四六)と叫ばれたゴルゴタのキリストと一つになりましょう。キリス

神の御前で一対一になる必要があります。そうすれば、神の正義に与ることが出来ます。霊的に救われるためには一人一人が、そして社会全体が悔悛し、立ち戻らねばなりません。神のもとに立ち戻らずに生きてゆくことはできないのですから。

4 灰の水曜日の呼びかけは心の内奥(内なる人)に向けられていきます。しかし、それは同時に共同体への呼びかけでもあります。共同体である教会も、悔悛するように、立ち戻るようにと呼びかけられています。人間は社会の中で生活しています。最も内的なものも社会に反映し、影響を与えます。この意味で、使徒勧告「和解と悔悛」を読み返してみなければなりません。これは現代の人々が最も必要とする勧告です。悔悛のしるしの喪失、さらに悔悛の精神の喪失は、憂慮すべきことです。霊的に救われるためには、一人ひとりが、そして社会全体が悔悛し、立ち戻らねばなりません。このことの重みは時が経っても変わることがありません。「救いの喜びを返し、寛仁な霊をもつて私を支えたまえ。」(詩篇五〇(五一)・十四) 悔悛は真の喜びを得るための基本的な条件です。四旬節は復活の喜びの準備をすることです。これは人間の存在全体に関わることからです。立ち戻らずに、神のもとに立ち戻らずに生きてゆくことはできません。というわけで、今日から教会は四十日間の断食を始めますから、使徒とともに宣言しましょう。「神が私たちを通してあなたたちに勧められるのであるから、私たちはキリストの使者である。キリストによって切に願う、神と和睦してとまれ。」(2コリント五・二〇) アーメン。(一九九一年の灰の水曜日)

教会の秘義を生かす

（ブラジルを訪れた教皇様は、みことばの祭儀を行われ、「福音化—教会、共同体、参加」について、ポルトガル語で話された。）

（…）「彼らは使徒たちの教えること、兄弟的な一致、パンを裂くこと、祈りをするに専念した。」（使徒行録二・四二）

いま読んで使徒行録の一節は、私たちにとってたいへん重要な箇所です。これがエルサレムでの最初のキリスト教共同体、キリストの使徒たちのまわりに集まった最初の共同体の生活でした。彼らはまだエルサレムの神殿とのつながりを保っていました。同時に、新約の教会を形づくるものを「家の中へ」持ち込んでいました。

使徒たちの教えること、すなわちキリストがもたらした、十字架の犠牲によって確認され、復活によって封印されたよい知らせを告げる神の言葉です。

パンを裂くこと、すなわち御聖体、贖い主の過越の神秘の秘跡です。

祈り。キリスト御自身が教えになったものです。

「十字架の道行」(第三版)

エスクリバー師の、主の御受難の場面観想より生れた書。黙想のし

確認されました。

これらのことには、すべて行いによる証明が伴っていました。それはキリストの命じた愛の掟、兄弟愛、社会愛として表されたものです。「彼らは自分たちの資産と持ち物を売り、おのおの必要に応じてそれを分けた。」（使徒二・四五）

初代キリスト教共同体の生活に関する証言を記しているがゆえ、使徒行録の本文は、弟子たちと、あらゆる時代のキリスト信者にとって特別な重要性を帯びています。ここに集う私たちにとつても同様です。

（…）高間のかげに生れたあの社会は、新しい「国々の光」となるよう召されました。それはキリストに召された（ローマー・六）人々の集まり、神が計画し、人間によって、構成員となるよう召された人間たちによって建てられる有機的・超自然的な社会です。それは人間に、最終的な復活という新しい希望を秘めた運命を指し示しています。

今日なお教会はあの「愛の普遍的な一致」の（教会憲章、二三番）基盤であり、信仰と秘跡と位階制の上にたっています。その中で牧

者と信者は、「真理と愛の霊」である主の聖霊に従いつつ、恩寵の源泉のかたわらで個人的に、あるいは共同体で養われて育てられています。（教皇庁でのお話、九〇年十二月二〇日付 三番）

第一に、信仰における一致は多様性をしりぞけません。多様性は愛による相互の奉仕のためです。この意味で、世界に対するローマ教皇の奉仕は、不可欠の役割を持ちます。全世界の教会が教皇にゆだねられています。あらゆるキリスト教共同体の全ての教会が必然的に、本質的にペトロの後継者（教会憲章、二三番）と一致しています。単に共同体であるというだけでは、一致（交わり）を意味しません。主の名のもとに集う共同体であっても、それだけで自動的に教会となるわけではありません。

教会であるというところは、信仰の賜と秘跡によって実現する各人の神との一致（交わり）、キリストとの一致に根ざしています。教会であるとは、つねに天の恵みのおかげです。ところでこの恵みは、神のお定めにより、「ペトロと共に、ペトロの権威の下に」司教団の一致に結びついています。

教会は一致（交わり）であるだけでなく、秘跡でもあります。すなわち人々と神、そして人々の間での交わり（一致）のしるしであり道具です。（教会憲章、一番）

一致をもたらず教会のこの力が交わりを作り上げ、その最高の表現が聖体です。信仰における交わりは、洗礼や他の秘跡と同一レベルで「聖体へと秩序づけられている。」（神学大全「第三部第六十五問第三項反論一に對して」）第二バチカン公会議は「聖体祭儀は明らかに宣教活動全体の源泉であり頂点である（司祭の役割と生活に関する教令、五番）と教えます。したがって、共同体の組織作り、要理教育、福音宣教活動をすすめる、子供も大人も全ての人をキリスト

キリストは利己主義の人を罰せられる

「主よ、いつ私たちはあなただけの餓えている時に食べさせたのでしょうか？」

この問いかけを心に留めていてください。これはたいへん重要な問い、決定的な問いかけです。いま読まれた聖マテオの福音書の最後の審判のたとえ話に出てくる問いです。

この審判の場面では、人の子キリストが世の贖い主として御父から受けた権限を行使して、世の終りに、全ての「良い知らせ」を確認なさいます。なぜ「良い」と言うのでしょうか。私たちはそこに人類の救いのための永遠の計画のあらわれを見て取ることができからです。「神は御独り子を与え給うほどこの世を愛された。それ

の救いの秘跡に導く仕事は、司祭、司牧関係者、修道者をはじめ、神の民の福音宣教に携わる全ての人の責務なのです。それゆえ彼らが聖体の秘義の意味をよく理解し、そのために熱意を燃やすすよう励ますことは、「みな一つにならなすように」（ヨハネ十六・二二）という主の言葉に完全な意味を与えることとなります。（…）

（九一・十五）

は、彼を信じる人々がみな滅びることなく永遠の命を受けるためである。」（ヨハネ三・十六）

永遠の命の代償は？無いです。しかし、限りある人間に、どうしてそのような代償が払えましょう？ どうすれば救われるのでしょうか？

最後の審判のたとえ話で、キリストは答えを示されます。永遠の救いを得るために各人が必ず払うべき代償はただ一つ、それは愛です。「主よ、いつ私たちはあなたの餓えている時に食べさせたのでしょうか」と、審判の時、義人たちは尋ね、人の子はお答えになります。「まことに私は言う。あなたたちが私の兄弟であるこれらの小さな人々の一人にしたことは、

説教・講話・書簡等の抄訳

ホセマリア・エスクリバー著 精進教育促進協会スタッフ訳
定価二二〇〇円 送料三〇〇円
定価二二〇〇円 送料三〇〇円

「拓」ホセマリア・エスクリバー著 新田壮一郎訳
定価一六〇〇円 送料三〇〇円

つまり私にしてくれたことである」と。(マテオ二五・四〇)

2

最後の審判は、地上における人間の歴史の終りと関わっています。同時に、マテオの福音を考えれば、この審判は常に続いているのだと確信せざるを得ません。それはいつでも、どこでも続いているのです。事実、人は他人々に善をなしています。餓えから救い、好意を示し、服を着せ、病人や牢にいる人を見舞っています。また、これらのことを何もしない人々もいます。自己の殻に閉じこもり、自らの安楽のみを追い求め、他人の難儀には無関心です。いずれにせよ、福音の終末論的な「右」と「左」の分裂は、人々の間で、さまざまな環境や社会の間で、さまざまに繰り返されています。

中で繰り返し起っています。したがって、審判についての真理はいつでも新しく、時宜に合ったものです。審判をいつ来るかわからない先の話と考えることはできません。審判は「今、ここで」の問題であることを知らなければなりません。「今、ここで」、社会全体の生活の中で、ブラジルの北から南で、さらに「今、ここで」例外なく、私たち一人一人の生活の中で、いま皆さんに話しかけている私の、そしてそれを聞いている皆さん方全員の生活の中で、この真理は、一人ひとりに関わってきます。

3

「だれがキリストの愛から私たちを離れさせよう。」(ローマ八・三三)

これは初代教会の信者たちへの聖パウロの問いかけです。彼らはしばしば、命を失うほどの危難と迫害の嵐にさらされていました。使徒は答えます。何者もキリストの愛から私たちを引き離すことはできないと。それどころか「私たちを愛されたお方によって、私たちは勝つてなお余りがある」(ローマ八・三七)と言っています。これこそまさに「良い知らせ」です。不正、偽り、死に脅かされる現代人にとっても。キリストの愛から私たちを引き離すものとは何でしょう。それは私たちの愛の不足のみです。私

ちの利己主義と無関心、冷淡さ、貪欲のみが、私たちを引き離すのです。これらは救いの敵であって、人の子の審判の日に私たちを裁き、判決を言い渡すでしょう。おそろくその時にはすでに、内なる良心の声となって私たちを糾弾しているかも知れません。何も聞かず、見ようとしないうちに、無感、どうすればよいのでしょうか。無感な良心も聞かざるを得ず、もはや黙っていられなくなる時がやってきます。その日良心は、十字架につけられ上げられた世の救い主、玉座につく人の子と、顔と顔を合せて向き合っていることに気づくでしょう。

4

「もし神が私たちの味方なら、だれが私たちに反対で

きよう」(ローマ八・三一)と使徒は尋ねます。神が私たちと共におられます。神は私たちの救いをお望みです。実際、「ご自分のみ子を惜しまずに私たち全てのために渡された」(同八・三三)のです。「死んで、いや、むしろよみがえって神の右に座し、私たちのために取りなしたもう」(同八・三四)イエズス・キリストによって、私たちは義とされています。ですから、誰が私たちをキリストの愛から引き離すのです。(…) (九一・十・十六、ブラジル・クイアバー市での聖体祭儀の説教)

主の洗礼の祝日に

◆

「その方は聖霊による洗礼を授けられる。」(マルコ一・八)

洗礼者ヨハネは、キリスト教徒の一人となる秘跡である洗礼を、キリストが制定されることを宣言しました。水と霊によって光の子、「イエズスが神の子であると信じる者」(一ヨハネ五・五)が新たに生れ、神の命にあずかります。洗礼によって注がれる新たな命、キリストの御血によってあがなわ

れた命、死と復活を通して与えられた命にあずかるのです。イエズスの公生活の始めに、天から鳩のように下った(マルコ一・十参照) 聖霊が、今日はここに

る小さな子供たちの新しい命に火をつけられます。新たな命は永遠の命となり、子供たちをイエズス・キリストの兄弟、キリストの神秘体の一員とし、神との交わりという筆舌に尽しがたい神秘に導きます。

◆

洗礼を受ける子供たちの御両親と代父母の皆さんにご挨拶します。

ごく幼い子供たちに恩寵と神的生命を与えるという皆さんの明らかな意向を知って、私はとても嬉しく思います。唯一の大樹キリストに接ぎ木され、今日からこの子供たちは、御子において娘、息子として御父である神の愛を受けます。

洗礼を通してこの子供たちの心に蒔かれた超自然の種子は、やがて大きな木となり実をつけます。子供たちが模範であるキリストに一致するように、福音の勇敢な証人となるように、救い主の確かな弟子となるように、御父は計画を

◆

立てておられます。

この小さな子供たちを共同体のなかに受け入れ、子供たちの内にキリストの姿を見る教会は、御両親と代父母の皆さんに成長を助け、支え、励ますよう信頼してお願います。神の養子とさせる成聖の恩寵の大切さを子供たちに最初に教えるべきは皆さん方です。キリストについてのよこばしい知識を日ごとに増してやるために、子供たちと話し合いを始めてください。

子供たちが大人になったとき信仰と聖性において成長し、自らのうちに希望を見いだすことができ、母であり師である教会と共に導いてください。神が示さ

れる召し出しのしるしを寛大に受け入れられるように教え導くことができるでしょう。

この子供たちの無邪気と美しさは私たちにとってこのうえない喜びです。そしてなおこの美しさが霊的で、生活と行いに反映していれば喜びはひとしおです。

今日の喜びが失われることのないように、この子供たちの上にお恵みが一生涯を通して豊かに注がれるよう、主に願います。 贖い主の御母マリアが皆さんと教会の希望を支え、慰めてくださいますように。信じて神の御旨にお応えになったゆえに祝された聖母に、この子供たちの命と希望を委ねます。(九一・一・十三)

不変の教え

「神の民」の集い

教会シリーズ ②

1 教会論のための前置きとして

「教会」とは福音書、およびキリスト御自身の言われた言葉に由来します。今回は最も古典的な方法に従って、まずそのものを指し示すのに使われる、用語の意味を調べてみましょう。ここで考えようとする「教会」のように古く偉大なものについては、その創立者がそれを何と呼んでいたかを知ることが大切です。その呼び名こそ、創立者の意図、計画、独創的な考えを表しているからです。

マテオの福音書を見ると、イエズスがペトロの信仰告白に答えて「御自身の教会」の創設を宣言される場面があります。(この岩の上に私の教会を建てて。「マテオ十六・十八) 主が使われたこの言葉が当時の普通の用法ではどんな意味を持っていたか、また旧約聖書のさまざまな箇所が使われている意味は何かを見ると、その意味論上の価値を知ることが出来ます。マテオ福音のギリシャ語テキストでは、ムー・テン・エクレシアン mou ten ekklesian という表現が使われています。このエクレシアンという言葉は七十人訳聖書に使わ

2 ヘブライ語のカハルも、ギリシャ語のエクレシアも、共に「集会、集り」を意味します。

共に「集会、集り」を意味します。エクレシアの語源をたどると、ギリシャ語で「呼ぶ」という意味の動詞カレイン kalein につながります。セム語の話言葉では「集会」(呼ばれて集まった)の意味で用いられ、旧約聖書では特に砂漠での、選ばれた民の「共同体」を意味しています。(第二法四・十、使徒行録七・三八参照)

イエズスの時代も、この言葉はまだ使われていました。とりわけクムラン派の文書の中で、闇の子らの戦いに関して、カハル・エル gahal el 「神の会衆」という表現が他の似たような表現と共に軍隊の意味で使われているのがわかります。(1QMS・10) イエズスは「御自身の」救われた人々の共同体、キリストの血における契約によって、高閣で宣言された契約(マ

テオ二六・二八参照) によって呼び集められた新しい集会について語る時、この言葉を使っておられます。

3 セム語用法でもギリシャ語

用法でも、集会の性質は召集者の意志と目的によって決まります。イスラエルでも古代ギリシャの都市国家(ポリス)でも、さまざまな集会が催され、中には世俗的な性格のもの(政治、軍事、または職業上の)も、宗教的な目的のものと同じくらいありました。

旧約聖書もさまざまなタイプの集会について言及していますが、選ばれた人々の共同体について述べる時には宗教的、神政的でさえある性格を強調しています。選ばれた人々とは、唯一の神に属することをはっきりと宣言して集められた人々のことです。したがって、イスラエルの民全員がヤウエのカハルであると考えられます。彼らがヤウエの「全ての民の中で、特に心にかけるもの」(脱出十九・五)であるからこそ、そのように呼べるのです。それは神への全く特別な帰属、関係です。この関係は、神との間の契約と、仲介者を通して神から民に与えられた掟を受け入れることに基いています。聖書の言うヨム・ハツカル yom hagahal 「集会の日」(第二法九・十、十・四)、神が民をお召しになったその時のことです。こうした帰属感、イスラエルの全歴史を通じて、たび重なる裏切りや危機、敗北の繰り返しにも拘わらず、

絶えることはありませんでした。その歴史には、神学上の真理に関する問題も含まれています。失望落胆の時代には預言者が現れて、神の名においてイスラエルの民に語りかけました。たとえば流刑時代の終りの(第二イザヤのように、「恐れるな。私はおまえをあがなひ、名を呼んだ。おまえは私のものである」イザヤ四三・一)と。これは、古い約束にしたがって間もなく神の力が介入し、民を自由の身にするだろうという告知です。

4 神御自身の意志による神と

この契約によって、全イスラエル人の性格は宗教的なものとなり、地上の旅路には良い時や悪い時がありましたが、その歴史全体を通して超越的な目的が与えられました。この事実、聖書の用語でイスラエルを指す「神の民」(カハル・ヘロヒル gahal Elohim nehemia十三・一参照、もつとひんばんには、カハル・ヤウエ gahal Yahweh 第二法二三・二、四、九参照)という言葉は説明されています。それは神に属しているという永続的な自覚であり、イスラエルが神によって選ばれたことに基いています。「全ての民のなかで、お前たちは特に私の心にかけるものとなる。：私にとって、お前たちは祭司の国、聖別された民となる。」(脱出十九・五、十六)

言うまでもありませんが、用語の分析という観点から話を続けると、旧約時代の人々は神の御名への尊崇から、カハル・ヤウエを

ケハル・アドナイ gahal Adonai すなわち「主の会衆」と呼び替えていました。このため七十人訳聖書は、エクレシアン・キリオン ekklesian Kyrion と訳されています。「主の教会」と言えます。

5 一つ付け加えて言えば、新

約聖書のギリシャ語訳者たちは七十人訳聖書の訳文に従いました。これによって、教会を神に帰属させるように、新しい神の民(新しいイスラエル)を「エクレシア」と呼んだ理由がわかります。聖パウロはしばしば「神の教会」(1コリント一・二、十・三一、十五・九、2コリント一・一、ガラタイア一・十三参照)、「神の諸教会」(1コリント十一・十六、1テサロニケ二・十四、2テサロニケ一・四参照)について語っています。こうした表現によって旧約と新約の連続性を強調しつつ、キリストの教会を「神のイスラエル」(ガラタイア六・十六)とまで呼んでいるのです。しかし、間もなく聖パウロは、キリストが創設した教会の実体を言います方法を考え出しました。「父なる神と主イエズス・キリストにある教会」(1テサロニケ一・一)、「キリスト・イエズスにおいて：神の諸教会」(同二・十四)と語っています。

ローマ人への手紙では「キリストの諸教会」(ローマ十六・十六)とさへ述べました。諸教会と言うからには、パレスチナ、小アジア、ギリシャの地方教会をも念頭においていたのでしょう。(つづく)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発
 行 定価 一部八十円 送料実費 一年予約九百円
 送料六百円 二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393